

No.	ご所属	ご質問	回答
1	小学校	アセスメントが不可能な、重度の子どもの認知処理過程をどのように把握していきますか？	知的障害の「重度」（知能指数：IQで34以下）でということであれば、田中ビネー式知能検査やK式発達検査2001を行うケースが多いだろう。それらの検査結果と行動観察から認知面についてのアセスメントを行う必要があるでしょう。知能検査を構成する下位検査の詳細について検討する必要があります。 また、重度重複障害児に対するアセスメントだと「徳永豊 編著『障害の重い子どもの目標設定ガイド』（慶應義塾大学出版会,2014年）」等を用いると良いでしょう。
2	小学校	25人学級内で、同時処理を得意とする子もいれば、継次処理を得意とする子もいる場合はどのように進めていくのが良いのでしょうか。	教える側が、両方のスタイルを理解してアプローチすることが重要となります。どちらの手段も活用できる（意識できる）と良いと思います。はじめは聴覚的情報と視覚的情報のバランスについて考えていくと分かりやすいものと考えます。
3	小学校	数の量、計算方法、ひらがな、カタカナ、漢字の読み方、などの定着が難しいお子さんへの支援方法について教えて下さい。	一言で語ることが難しいので概略だけ述べさせていただきます。挙げられた各学習については、様々な支援法が開発され書籍もたくさん出ていることと思いますのでそちらをご参照ください。重要なのはそれらの課題や方法が本人に合ったものであるかどうかだと考えます。
4	小学校	ワーキングメモリーが低いグレーゾーンのお子さんがいます。継次処理タイプか同時処理タイプか、簡単に見分ける事は可能でしょうか？	ニーズの高いお子さんの場合は知能検査・認知検査等のアセスメントを実施した方が良いですが、藤田和弘著「『継次処理』と『同時処理』学び方の2つのタイプ」（図書文化、2019年）やナグリエリ・ピカリング著 前川久男・中山健・岡崎慎治訳「DN-CASによる子どもの学習支援」（日本文化科学社、2010年）が参考になるかもしれません。
5	小学校	担任と合わないのは、辛いところですが、合わないと感じた時はどのようにしたらいいですか？担任は同時です。	教える側が様々な方法でアプローチすることが求められるのだと考えています。理解の仕方は十人十色であることを誰もが理解できる社会だと良いですね。「この子はAの手段よりもBの手段の方が分かりやすい」ということを伝えていくことが大事なのかもしれません。そして「この子だけでなく他の子にも同じようなタイプがいるかもしれない」ということも同時に伝えると良いのかなと思います。
6	小学校	事例①に似た児童を指導しています。なぜ声を出さないとできないのか、なぜいたずらをしてないと集中ができないのか、その奥の子供の特性や心理をもう少し知りたいです。教えてください。	事例①について、最初の映像は小学2年生3月のものでした。既に学習に対する回避が見られていた＝学習（特に算数）に苦手さを感じていました。自分の苦手な気持ちや「やりたくない」という気持ちと大人側からの「勉強してみよう」という要請との葛藤で声を出して自分の心理的安定を図っているものだと考えられます（事例①は「やだ！」と意思をはっきり伝えていましたが）。「手いたずら」をするというのも、目の前の課題が理解できない・教師の指示を理解できなかった等の理由が考えられます。本人が理解できる方法で取り組むとスムーズに課題を遂行できるようになったことから分かるように、本人の理解しやすい方法でまずは「できた」という感触が持てる課題から取り組めると良いでしょう。
7	小学校	苦手な処理能力はそのまま放置で良いのでしょうか。そちらのフォローはどう考えたら良いですか。	長所活用型指導とは、得意な処理様式・強い能力を積極的に使うことで苦手な活動に参加したり新しいスキルを獲得したりしていくことを指しています。これは、「強い能力をうまく使えるようにしていく」ということで、「弱い能力を全く使わない」＝放置する、ということではありません。弱い能力に焦点を当てて訓練をするということは「短所改善型指導」といいますが、この方法は習得に大変時間がかかり、学習がどんどん遅れることになっていきます。事例①・②では、それぞれが得意な方略で取り組むことにより、できなかった課題ができるようになりました。その中で、それぞれが得意な方略だけを使い、苦手な方略を全く用いていなかった、というわけではないのです。どちらか一方だけで事足りるということとはまずありません。例えば文を音読する時は、一字ずつ音読しながら（＝継次処理）、語のまとまりを理解（同時処理）していきます。大事なものは、得意なスタイルに焦点を当てて・強調することで、本人にとって理解しやすくなるということです。

8	小学校	将来的には、どちらのタイプに成長させるのが良いですか？	本人の得意な認知処理様式を活用できるのが良いでしょう。
9	小学校	エレベーターカードを実際に活用しています。8+3のような計算ができるようになったのですが、まだ、活用しないと計算ができません。どのくらいまで活用していけばいいでしょうか？目標はエレベーターカードを使って計算ができるようになったら、エレベーターカードを使わなくても8+3の計算ができるようにしたいです。	今回紹介した事例①②では10の補数を活用した繰り上がり・繰り下がりの計算方法の習得でした。その際に、それぞれ得意な認知スタイルで解く課題を20問やる毎に、いわゆる普通の問題「8+3=」の形式のテストを20問実施していきました。テストの際は分からない場合はエレベーターカードを使っても良いことにし、できるだけ学習したことを思い出しながらテストに取り組んでもらいました。「普通の」問題を見ると途端に嫌がるお子さんは多いと思います。その時に、本人の得意な方法で解く練習したことを思い出ししてもらいながら取り組むと良いと思います。
10	小学校	WISC-IVだと、継次処理が得意、同時処理が得意は、どこで判断すればいいですか？	WISC-IVは立脚している知能理論が異なるため、継次処理・同時処理という観点から考えることができません。
12	中学校	学び手のタイプを判断する際には、本日のようなチェック表を用いれば良いのでしょうか。	ご紹介したものの他、No.4でお示した書籍に詳細が記載されておりますので、そちらも参照していただければと思います。
13	中学校	板書で、ノートの手書き方によっても継次処理と同時処理の傾向がわかるのですか？	ノートの取り方にも特徴が出るものと思います。板書と同時に自分が考えたことや思ったことをメモする生徒も多いかと思います。上から下・右から左へといった特定の方向へ書いていく方法は継次処理的、イメージマップ/マインドマップ/概念マップのように言葉を放射状に記していくタイプだと同時処理的だと考えられます。
14	中学校	漢字の部品がバラバラになってしまうのはどうすれば良いのでしょうか？	書く時に漢字の部品がバラバラになるということは、まとまりで出力することが難しいということが予想されます。漢字の筆順と同時に各部品（要素）に着目した指導の効果が認められています（小池・雲井・渡邊・上野（2002）LD児の漢字学習とその支援。北大路書房）。また、あまりに書くことが難しい場合は、PC等でのキー入力や音声入力を活用するといった手段も考える必要があるかもしれません。
15	高校	書字に問題のある生徒が多くいます。LDもあるのですがスムーズに行うにはどうしたらいいですか？一番頭に浮かぶ生徒は聴覚にも視覚にも問題があります。	上記No.14と同様に、本人のやりやすい方法で学習を進めていくことが大事になってくるものと思います。アセスメントをしっかり行うこととICTを活用することが必要かもしれません。現在、高校入試や大学入試における合理的配慮としてICT機器の活用が挙げられており、対応している自治体も増えてきています。本人の「これならできる」といった方法を見つけることも重要になるでしょう。
16	特別支援学	継次処理が得意ということに関してはイメージがしやすいのですが、同時処理が得意というタイプの具体例があれば教えてください。	具体的な例としては、今回実施したチェック表でBに分類される質問項目が挙げられます。
17	特別支援学	児童や生徒の認知処理のスタイルを簡単にチェックする方法は他にありますか？	簡単に行うというのはなかなか難しいですが、No.4に紹介した書籍等を参照していただければと思います。
18	特別支援学	ASD、ADHD等認知処理の傾向はあるのか？。藤田先生はASDは経時処理が苦手と常々言っていたが。	（別紙に当日お見せした資料を記載いたします）
19	特別支援学	アセスメント自体が難しい（心理検査用具がない等）場合はどのように把握すれば良いのでしょうか？	No.1やNo.4をご参照ください。

20	特別支援学	<p>継次処理、同時処理の傾向を見とる方法は、紹介していただいた書籍を読むとわかるのでしょうか？あるいはエピソードを集めて判断していくのでしょうか？</p>	<p>詳しくはNo.1・No.4をご参照いただければと思います。アセスメントにはエピソードを収集することも必要です（例えば検査結果の数値とエピソードのすり合わせが重要となる）。ここで、本郷一夫先生の「子どもの理解と支援のための発達アセスメント」という書籍で挙げられている『発達アセスメント』について記します。「発達アセスメントとは、人を理解し、人の行動や発達を予測し、その発達を支援する方法を決定するために行われる測定・評価と定義される。」とあります。また、発達アセスメントの目的として「発達支援のニーズを把握するためのアセスメント」「支援目標・方法を決定するためのアセスメント」「発達を確認するためのアセスメント」「支援の妥当性を確認するためのアセスメント」の4つが掲げられています。詳細は書籍で確認していただければと思いますが、アセスメントは「子どもの発達を理解し支援するものである」ということ、「支援によって、現在の子どもの生活をどのように豊かにするのか、子どもの将来の発達をどのように準備するのかといった点が重要」です。そのためには知能や発達の理論の理解が重要となってきますね。</p>
21	特別支援学	<p>得意な同時処理が伸びれば苦手な継時処理が伸びるのか？</p>	<p>例えば、得意な同時処理に焦点を当てることで、継次処理的な課題も同時処理方略を活用して問題解決をすることができるといえます。そうすると結果的に伸びたように「見える」といえます。実際に継次処理能力が伸びたかどうかは分かりませんが、その子が自分の得意な能力を活かして苦手な課題も解決できるということが重要だと考えます。</p>
22	特別支援学	<p>継時処理型は事務仕事が得意、同時処理型は芸術活動が得意だと感じるがどうでしょうか？</p>	<p>「継次処理型は芸術活動は苦手、同時処理型は事務仕事が苦手」と言えるかどうか？が問題ですね。事務仕事が得意な人に継次処理タイプが多い・芸術活動が得意な人に同時処理タイプが多い、と可能性としてはいえるかもしれませんが。</p>
23	特別支援学	<p>得意なタイプが、右脳型、左脳型という視点はありますか？</p>	<p>現在の脳科学研究では、左右の優位性に関しては「無い」という見解が一般的です。継次処理・同時処理の脳の賦活部位は別紙参照してください。</p>
24	特別支援学	<p>認知の「かたより」があると、支障はどこにありますか？</p>	<p>得意な認知能力を生かせない場合に「支障」が出るものと思います。順番に処理するのが苦手、情報の関連性を捉えるのが苦手...様々な苦手さがありますが、それを自分の得意なやり方やツールで処理できれば「支障」はないものと考えます。</p>